

# Museum News



絵：柳田基

## 2017 秋学期

### 展覧会 / 講演会

#### 企画展

装いの上海モダン

— 近代中国女性の服飾 —

2017.10.28 (土) ▶ 12.16 (土)

#### 開催記念講演会

「用の美」の衰退

— 「旗袍」から「チャイナドレス」への変遷をみる

2017.12.2 (土) 13:30 ▶ 15:00

会場：西宮上ヶ原キャンパス

B号館 103号教室

参加費：無料

#### 平常展

Gift for the Future

関西学院のあゆみ

— ニュートンと時計台 — (仮)

2018.1.15 (月) ▶ 3.24 (土)

#### 連携関係※

##### シンポジウム

大学建築を探る

～ヴォーリズと村野藤吾～

2017.11.25 (土) 14:00 ▶ 17:00

会場：関西大学 KU シンフォニーホール

参加費：無料

定員：300名 (先着順)

#### 展覧会

演じる私たち

～戦後20年関西「新劇」の軌跡～

2017.10.23 (月) ▶ 12.22 (金)

会場：大阪大学総合学術博物館

#### シンポジウム

戦後の関西「新劇」を考える

～市民生活と演劇～

2017.12.2 (土) 13:30 ▶ 17:00

会場：大阪大学豊中キャンパス

基礎工学部国際棟Σ (シグマ) ホール

参加費：無料 (申込み制、先着順)

## 開かれた大学博物館をめざして

# 連携する大学博物館

### 多彩な大学博物館の連携

2007年に発行された『大学博物館事典』には、日本全国130大学に付設された162の大学博物館が収録されています。2014年に開館した本館は、残念ながら登場しませんが、ページをめくると実にいろいろな博物館が掲載されています。そこには大学の個性があらわれたユニークな博物館も少なくありません。

本書の副題には「市民に開かれた知とアートのミュージアム」とあります。しかしながら、2007年の時点で大学の博物館がどれほど市民に開かれていたのでしょうか。大学博物館は、小規模なところが多く、予算も十分ではありません。個々の大学博物館がユニークであっても、それをアピールするには限度がありました。そこで始まったのが大学博物館の連携です。その方法もさまざまですが、市民に開かれた博物館ということでは、まず地域における連携です。

幸いにも、本館が開館したときには、すでに「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」が構築されており、さっそくに参加させていただくことになりました。同ネットワークは、関西圏にある18の大学ミュージアムが連携して、大学組織の枠組みを越えた活動をおこなっています。

### かんさい・大学ミュージアムネットワークにおける連携

本年度、「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」では、文化庁の支援事業として「交流する大学ミュージアムを目指して 大学の扉を開く」の名のもとに事業を展開しています。その企画の一つとして、関西大学と本学のキャンパス形成に大きく関わった2人の建築家、W. M. ヴォーリズと村野藤吾をと

りあげ、バスツアーとシンポジウムを開催します。11月16日(木)のバスツアーでは、本学のキャンパスをはじめ、村野藤吾設計による尼崎市庁舎と同市内の大庄公民館(旧大庄村役場)、そしてフランク・ロイド・ライトの愛弟子・遠藤新設計の武庫川女子大学甲子園会館(旧甲子園ホテル)を巡ります。また、11月25日のシンポジウム(左欄参照)には、本学から田淵結院長が登場して「キャンパスが語りかけるメッセージ」と題する講演がおこなわれます。

いっぽう、大阪大学総合学術博物館の特別展「演じる私たち～戦後20年関西「新劇」の軌跡～」では、共催というかたちで本館が所蔵する大阪労演資料を多数出品します。また、この展覧会に関連する12月2日(土)のシンポジウム(左欄参照)には、本学文学部の高岡浩之教授がパネリストとして登壇します。

このように学内からの協力を得ながら、ネットワークにおける連携を通じて、本館も活動の場を広げ、市民に開かれた大学博物館を目指しています。

### 学内での連携

学外との連携もさることながら、学内での連携も欠かせません。これまででも展覧会の企画や講演会には、学内から多くのご支援を賜ってきました。今秋は、言語教育研究センターが開催する中国文化週間と連動し、同センターとの共催により企画展「装いの上海モダン —近代中国女性の服装—」を開催します。また、その記念講演会(左欄参照)では、言語教育研究センターに加えて国際服飾学会の共催を得て、学術的なシンポジウムがおこなえるように連携を進めています。

(大学博物館長 河上繁樹)

# 展覧会報告 I

## 企画展

### 日中のかけはし

—愛新覚羅溥傑家の軌跡—

愛新覚羅溥傑と嵯峨浩の次女である、福永媯生氏から御寄贈いただいた愛新覚羅溥傑家の資料を中心に、満洲ツーリズムに関わるものも併せて紹介しました。

2017.6.5 (月) ▶ 7.22 (土)  
9:30 ~ 16:30 (日曜休館)

開館日数 42日  
入館者数 2,019人



## 日中のかけはし

—愛新覚羅溥傑家の軌跡—



### 資料の寄贈

#### 愛新覚羅溥傑家資料

2013年10月、関西学院大学博物館は愛新覚羅溥傑(1907-1994)と浩(1914-1987)の次女福永媯生氏より、愛新覚羅溥傑家関連の貴重な資料を受贈しました。これを受け、2015年に企画展「愛新覚羅家の人びと—相依為命—」を開催し、好評を得ました。以降も数度にわたり、資料を御寄贈いただいています。その内容は手紙や書画等をはじめとして多岐にわたり、総数も膨大です。今回の企画展では、これらを通して、日中のかけはしとなるべく激動の時代を生き抜いた溥傑一家の軌跡をたどりました。

### 愛新覚羅溥傑家の軌跡

#### 結婚から動乱の日々へ

溥傑は、清朝最後の皇帝となり、後に「満洲国」皇帝ともなる溥儀の弟として誕生しました。溥傑は軍人として兄を支えるため、同盟国日本の士官学校に留学します。一方、浩は昭和天皇とも遠戚の華族の令嬢として育ちます。

この2人が当時としては珍しい「国際」結婚に至る背景には、日本の軍部の関与がありました。すなわち、軍部による満洲への支配強化、延いては2人の間に生まれるであろう子に、「満洲国」の皇位を継承させるという目論見があったのです。政略結婚であったものの、ここに溥傑一家による最初の日中のかけはしが生まれたのです。しかし、やがてこの結婚が、一家を数奇な運命へと導いていくこととなります。

終戦の際に溥傑はソ連軍に捕縛され、後に中国へ送還されます。一方、浩は媯生と共に一年

数ヶ月に及ぶ中国での流転の旅を経て、長女慧生(1938-1957)が待つ日本に帰国します。一家は離散し、日中のかけはしとなる願いは途絶えようとしていました。しかし、再び一家を結ぶべく、慧生が日本と国交のなかった中国の首相・周恩来に、溥傑との文通を請願しました。文通が許可され、中国で収監中の溥傑と日本で暮らす浩たちに小さなかけはしが復活したのです。

### 文通

#### 愛の書簡

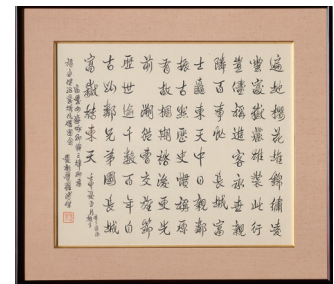
書簡は検閲されていたものの、溥傑一家の文通は続いていきました。収監中の溥傑と浩たちの間の書簡には、日中の国交回復や溥傑の釈放への期待、娘たちの勉学に励む様子などが綴られています。しかし、一家に悲劇が降りかかりました。慧生が急逝したのです。悲しみに暮れる一家の様子が書簡から伝わってきます。その後、溥傑の釈放や家族の再会を経て、溥傑と浩は中国に、媯生は日本にそれぞれ生活の基盤を築きました。離れて暮らしていても、家族の強い絆が感じられる書簡が多く残されています。

### 愛新覚羅溥傑家の使命

#### 日中のかけはし

溥傑は平和の大切さとともに、日中友好のかけはしとなるのが溥傑一家の使命であると述べています。日中の国交回復後、中日友好人士訪日代表団員として来日するなど、溥傑は日中友好に尽力しました。また、書家としても著名な溥傑は、自身の来日や媯生の訪中の度に漢詩や書を残しています。そこには、溥傑のその

時々における家族への思いや、日本と中国のあるべき関係について詠まれています。



溥傑書「宿愛女家詠興即興歌」(1992年)

### 満洲ツーリズム

#### 日本から「満洲国」への旅行

日本から満洲へのツーリズム(旅行)は、日露戦争終結後から次第にその機会が増えていきました。今回の企画展では、本学文学部教授(地理学地域文化学専修)の荒山正彦氏の協力を得て、「満洲国」の時代を中心に、満洲ツーリズムに関わる資料(当時の旅行案内書、地図、絵葉書など)を展示しました。これらを通して、溥傑一家以外の人々の満洲への認識についても紹介しました。

#### 開催記念講演会

会期中の7月1日(土)には、本学文学部教授(アジア史学専修)の飯倉篤秀氏による「国の歴史・人の歴史—「満洲国」と愛新覚羅溥傑浩夫妻—」と題した、開催記念講演会を開催しました。内容は清朝末期の皇室、溥傑と浩の生涯に関するもので、200名を超える方にご参加いただき、盛況を博しました。

# 展覧会報告 II

## 平常展

### Gift for the Future 関西学院のあゆみ

大学博物館では、博物館を訪れてくださる皆さんとともに学院が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考え、「Gift for the Future 関西学院のあゆみ」と題する平常展をシリーズで開催しています。



上ヶ原校地建設委員会メンバー (1929年頃)



スケッチブック (1936年)

## 平常展

### 大学昇格をめざして・上ヶ原移転物語

#### 特集陳列

#### 渡辺禎雄の版画でみるイエスのほたるき

2017.4.1 (土) ▶ 5.27 (土)

9:30 ~ 16:30 (日曜、4月29日休館)

開館日数 48日

## 平常展

### 学院を築いた4人の院長

#### 特集陳列

#### C. J. L. ベーツ生誕 140周年

2017.8.1 (火) ▶ 10.21 (土)

9:30 ~ 16:30 (日曜、8月11~21日、9月18、23日休館)

開館日数 61日

## 新入生にむけて

### キャンパスの歴史をたどる

大学博物館が位置するのは、西宮上ヶ原キャンパスです。このキャンパスは、関西学院を象徴するキャンパスとして親しまれています。しかし、関西学院は創立の時からこの上ヶ原に存在したわけではありませんでした。現在の神戸市灘区、王子動物園や神戸文学館のある原田の森と呼ばれた地で誕生しました。

その地を離れ、上ヶ原にやってきたのは1929(昭和4)年3月のことでした。当時の学院は大学開設を目指していました。しかし、大学設置に必要な供託金の捻出で行き詰まります。その最中、キャンパス移転により必要な資金を調達する案が浮上し、阪神急行電鉄(現在の阪急電鉄)株式会社との交渉の末、上ヶ原への移転が実現しました。本展示では、高等学部学生会を中核として活発化した大学昇格運動をはじめ、キャンパス移転にまつわるエピソードをご紹介します。

## 特集陳列

### 描かれた神の教え

同時開催の特集陳列では、渡辺禎雄(1913-1996)の型染版画をご覧ください。幼い頃に父の死や関東大震災などの危機を経験したことをきっかけに洗礼を受けた渡辺は、24歳のとき染物屋の仕事に就きます。そこで、日本の伝統的な美術の表現の妙味に次第に惹かれていきます。1943(昭和18)年、東京駒場の日本民藝館へ訪問したことが、渡辺の芸術生活に決定的な影響を与えました。芸術と宗教の一致を力説する柳宗悦の民藝思想に触れ、また琉球染の紅型や技法などの説明を芹沢銈介から受けたからです。

渡辺が描く聖書の世界は、彼自身の体験や日常生活、日本の文化風土をもとに解釈されています。例えば、「イエスと子ども」という版画では、イエスの周りにいる子ども達は手に鯉のぼりや羽子板を持ち、中には着物姿の女の子も描かれています。今回は洗礼を受けたイエスが「たとえ話」を用いて説教する場面や、奇跡によって人々に神の教えを伝える場面を展示しました。

## 学院のはじまり

### 院長たちの想い

本展示では「学院を築いた4人の院長」というテーマのもと、創立者から第4代までの院長(W.R. ランバス、吉岡美国、J.C.C. ニュートン、C.J.L. ベーツ)についてご紹介しました。

関西学院はアメリカ・南メソヂスト監督教会による伝道者養成と青少年へのキリスト教主義教育を目的として、1889(明治22)年に創立しました。ランバスの教育への情熱とわずか19人の学生から出発した本学院は、理想を目指した彼らの働きによって発展していきました。その過程で誕生した学院のシンボル「新月」やスクールモットー「Mastery for Service」は今も受け継がれています。草創期の苦しい時期を支え、本学院の精神的な礎を築いた彼らの軌跡を、各院長ゆかりの品々からうかがいました。

## 特集陳列

### 第4代院長の横顔

2017年はカナダ建国150年にあたります。そのカナダ・メソヂスト教会から、本学院にとって最初のカナダ人宣教師として1910(明治43)年に派遣された中にC.J.L. ベーツ(1877-1963)がいました。本年は、高等学部長、第4代院長を務めたベーツの生誕140周年でもあります。それを記念し特集陳列という形で、ベーツと学生との関わりや彼が描いた水彩画、近年ご遺族から新しくご寄贈いただいた資料をご紹介します。

現在も西宮上ヶ原キャンパスにはベーツの住居が残っています。1940(昭和15)年、戦時体制が強化された日本で、外国人教師は帰国を余儀なくされました。関西学院理事会は住居を保存し、「ベーツ館」と呼ぶことにしました。この館は1999(平成11)年より国内外からの賓客を迎えるゲストハウスとして活用されています。この「ベーツ館」からの眺めをベーツは水彩画に残していました(画像参照:「スケッチブック(1936年)」。学院史編纂室の新収蔵品の中から家族への想いを感じる資料として、ベーツが三男ロバート(1913-1993)に贈った本も展示しました。学生に寄り添いながら学院発展のために尽力したベーツの人柄にも思いを馳せていただければ幸いです。



## 次回の企画展

広岡今日子コレクション

# 装いの上海モダン

## —近代中国女性の服飾—

前期展示：2017年10月28日（土）～11月22日（水）

後期展示：2017年11月24日（金）～12月16日（土）

※展示期間中、日曜日と11月23日（木）は休館いたします。

※本展覧会は前期と後期で展示内容が一部異なります。

### チーパオ 旗袍って何？

今回の主要な展示品は、中国語で旗袍とよばれるいわゆるチャイナドレスです。私たちはチャイナドレスというと、太腿まで深くスリットの入ったセクシーな服装を思い浮かべるとともに、中国女性が古くから身につけてきた伝統的な民族衣装のように捉えがちです。しかし実際のところ旗袍は近代に登場し、1920年代から30年代に全盛期を迎えた新しい服装であり、当初は日常着としても着用したため、多くの人が想像する「チャイナドレス」とは異なる実用になったものでした。

### 1910年代から70年代の服飾

近年では日本においても旗袍に関する展覧会が開催され、多くの関心を集めています。このような潮流の中で、本展覧会は隣国として古くから我が国に大きな影響を及ぼしてきた中国および中国語圏の文化についてより深く知っていただくこと、本学言語教育研究センターとの共催で企画したものです。日本屈指の旗袍コレクターである広岡今日子氏のコレクションの中から、主に上海で着用された海派旗袍を中心に、1910年代から70年代の近代中国女性のモードを紹介いたします。旗袍の他、アクセサリーなどの服飾雑貨、広告ポスターをあわせて展示することで、服飾としての美しさとともに、当時を生きた女性をより身近にいきいきとした姿で感じていただければ幸いです。



1910年代のコーディネート



クラブ化粧品のポスター（1930年代）

開催記念講演会  
**「用の美」の衰退**  
 —「旗袍」から「チャイナドレス」への変遷をみる—  
 講 師：広岡 今日子氏（旗袍コレクター、展覧会監修者）  
 コメント：江川 静英氏（青森大学教授、国際服飾学会理事）  
 進 行：成田 静香氏（関西学院大学文学部教授）  
 日 時：2017年12月2日（土）13:30～15:00  
 会 場：西宮上ヶ原キャンパス B号館 103号教室  
 共 催：関西学院大学言語教育研究センター、国際服飾学会  
 申込不要・聴講無料



関西学院大学博物館通信 第4号  
 KGU MUSEUM NEWS No.4

2017.10.1

関西学院大学博物館  
 〒662-8501  
 西宮市上ヶ原一番町 1-155  
 TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462  
 URL <http://museum.kwansei.ac.jp/>